

新たな社会的パラダイムにおける風景の止揚と再獲得

○高山 範理*

1. はじめに

“風景とはその観る方法を知り、味わうことにより成し遂げられる”とフォン・コーニッシュが指摘している。この指摘は「風景」とは物理的な環境の「眺め」であり、鑑賞者がその眺めに付与された意味や価値をくみ取ることで「獲得」されることを意味するものとして解釈できる。また「風景」は、古人が“人は現実のすべてが見えるわけではなく、多くの人は見たいと思う現実しか見ない”と言及した指摘に倣った現象でもある。すなわち、主体側の当該「風景」に対する知識や特別な感情の有無、またはそれらを「眺め」の解釈に活用される能力（リテラシー）が異なれば、たとえ同じ「眺め」を体験した人々の間でも「風景」に対する評価に差異が生じえる。風景研究者の間では、これまでにその差異自体が多くの研究アプローチを生成してきたことなどについてはよく知られたところだろう。一方、ますます加速化していく近年において、前述の“「風景」の獲得のされよう（「風景」のあり様）”が、以前に増して複雑化しているように感じられる。これには私たち主体側に依拠した理由と、客体（環境）側に由来した理由がありそうだが、いずれにしても「風景」を研究する側は、そうした変化・動向に目配せしつつ、各自のなすべきをなし、着実に計画や実践に反映していく能力がこれまで以上に求められているように思われる。そこで、本稿ではそれらの変化・動向の一端に触れるとともに、現在のような状況下で、風景研究者がどのように対応し、計画への対応を担保していけるのか等について少し議論したい。

2. 技術の進展による新しい「風景」の誕生

昨今のITやスマートテクノロジー等の情報関連技術の発展には目覚ましいものがある。私たちの関心事である「風景」についても、自然風景を日常的に接する（セミ）パブリックな空間や家庭等の屋内内に再現しようとする様々な試みが行われている。これには、「風景」のシンボリックな要因を抽出し、屋内等で再現しようとするもの（例：大阪富国生命ビル（写真1））、「風景」の持つポテンシャルを技術的に可能な範囲でそのまま再現しようとする試み（例：デジタル森林浴（写真2））などがある。それぞれ都市住民の一時的な休息の場として活用され、それぞれに高い評価を得ている。また、丸の内にある「大手町の森」のように、本来ではあり得な

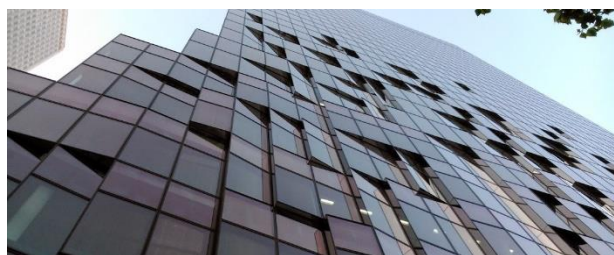


写真1 大阪富国生命ビル内での風景体験



写真2 デジタル森林浴による風景体験



写真3 都市の森：「大手町の森」でくつろぐ人々
い場所に、技術の力によって福音がもたらされることもある（写真3）。同施設は明治神宮の100年の森づくりから学んだ知見を技術として応用し、最新の土木技術と組み合わせることで成立したものであり、今では周辺の業者からの憩いの場となっている。自然が都市部に出張してきたか、その逆かの違いはあるが、いずれの事例も本来あるべき場所に成立した「風景」ではないことから、個別の「風景」の評価は可能でも、相対的な評価や価値付けは難しいように思われる。

3. 風景体験の機会の喪失による「風景」の画一化

風景体験の機会の喪失については、これまでに指摘されることもあったが、それが実際にどのように「風景」の評価やその後の関わり方に影響を与えているのかについては断片的にしか報告されておらず、現在もその大勢に変化は無いように思われる。しかし、隣接する「自然体験」に関する成果などから、その重要性について類推することが可能になる。たとえば、曾我ら²⁾は世界中の自然体験に関する研究報告・データを集め、国内を含む多くの先進国で社会の「自然離れ」が急速に進んでいることを示している。こうした経験の消失は①私たちの健康

*国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所

や生活の質を害し、②また、自然に対する興味や関心、保全意識を大きく衰退させ、③さらに経験の消失は悪循環をもたらし、社会の自然離れが今後もより一層と進んでいく可能性があることを言及している。このことが、「風景」についても適用できるとするならば、風景体験の機会の喪失によって、今後「風景」に関心をあまり持たない層が増加する可能性がある。また、風景計画はある程度の公共性を基礎して行われることが多いことから、こういった将来的に生じる国民的变化が、風景計画の合理性に多大な影響をもたらすことも考えられる。

4. コロナ禍等による「風景」へのニーズと期待の変化

国内では2020年1月から本格化した新型コロナウイルス感染症によって緑地全般の価値が見直されることになった。特に、第1回目の緊急事態宣言（2020年4月7日～5月6日）の前後には、多くの近隣の都市公園が行き場を失ったファミリー層などを中心に、これまで閑散としていた公園ですら賑わいをみせた。これには、子供たちを少しでも密にならない広い場所で遊ばせてあげたいという心性と、居心地の良い場所としての緑地の持つ機能が重なって集中的にニーズが高まったためだと思われる。この傾向は、より厳格なロックダウンが履行された海外においても同様であった。世界的なデータ分析から、ほとんどの国にパンデミック前後で緑地の訪問者が増加したことが報告されている。その理由としては、各種遊興施設等の閉鎖が一因³⁾とされてる一方、基本的にはソーシャルディスタンスを保ち、心身のレジリエンスを担保する場所として期待されていたことが報告されている⁴⁾。

また、このような身近な緑地・自然物とのふれ合いの折には「風景」のあり様にも変化が生じていたことが報告されている。特に都市部では窓から樹林の「風景」が見える家に住んでいた人々は、そうでない人々に比べ、「不安感」や「抑うつ感」が共に低かったことが報告されている⁵⁾。まだしばらくの間、コロナ禍が続くことを考えると、今回の体験によって「風景」を評価する私たちのリテラシーが多少なりとも変化した可能性を考慮し、計画の折に対象に応じて「風景」の機能のプライオリティに、これまでと異なった順位付けを考えるなどの配慮が必要になるだろう。

5. 「風景」についての止揚とそれぞれの再獲得

今後、複雑化した「風景」のあり様を探っていくためには、まずはそれぞれのセクションにてさらに深い議論を積み重ねていく必要があるように思われる。しかしその後には、個別セクションにて議論した「風景」のあり様を統合し具体的な計画に反映していくためのオルタナ

ティブな議論の場（フォーラム）がこれまで以上に重要になるのではないかとと思われる。このプロセスは、経験知、科学的妥当性、歴史性、正当性、審美性や調和性、維持保全策などの「風景」を成立させる諸要因について、空間軸・時間軸に目配せしつつ、時機に応じた合理的な風景計画の組み立てを行うのに不可欠である。また、基盤的な知識は共有しながらも、視座の異なるアクター間の議論によって、「風景」を巡る議論に「止揚」が生じることで、より計画自体に磨きがかかるだろう。

一方で、上記のようなフォーラムにて議論を進めていくためには、個々人（や属しているセクション）の考え方や成果が、他者のそれらと相対化できるとお互いに理解が容易になる。各自の視座が可視化できればどのようなものであってもよいが、ここでは、その道具立てとして、かつて初期の環境心理学者であるアービン・ズービ⁶⁾が提唱した風景研究の3つのパラダイムと4つの評価区分を挙げておく。まずパラダイムは、工学を中心とした1)実学的パラダイム (Professional)、2)心理学を中心とした行動学的パラダイム (Behavioral)、3)人文地理学や文化地理学などを中心とした人文学的パラダイム (Humanistic) である。また評価区分は①エキスパート (Expert)、②精神物理 (Psychophysical)、③意味論 (Cognitive)、④体験論 (Experiential) に分かれる。

時々の時代的要請などによってポピュラーになる評価方法は異なるが、このような道具を意識することで議論のすれ違いを避け、濃縮した議論を積み重ねることが可能になる。また、風景研究者が自分たちの研究アプローチがどこに該当するのかについて常に自覚しておくことで、時代に沿って変化する「風景」の滋味について「再獲得」する際の有用なツールにもなるだろう。

補注及び引用文献

- 1) フォン・コーニッシュ (著)、東洋恵 (訳) (1980): 風景の見方、中央公論社、180pp
- 2) Soga, M., Gaston, K. J. (2016) Extinction of experience: the loss of human-nature interactions", *Frontiers in Ecology and the Environment*, 14(2), 94-101.
- 3) Karl, S., Barthel, S., Colding, J., Macassa, G., Giusti, M. (2020). Urban nature as a source of resilience during social distancing amidst the coronavirus pandemic. *OSF preprints*.
- 4) Geng, D. C., Innes, J., Wu, W., Wang, G. (2021): Impacts of COVID-19 pandemic on urban park visitation: a global analysis, *Journal of forestry research*, 32(2), 553-567.
- 5) Dzhambov, A. M., Lercher, P., Browning, M. H., Stoyanov, D., Petrova, N., Novakov, S., Dimitrova, D. D. (2020): Does greenery experienced indoors and outdoors provide an escape and support mental health during the COVID-19 quarantine?. *Environmental Research*, 110420.
- 6) Zube, E. H. (1984): Themes in landscape assessment theory, *Landscape Journal*, 3, 104-110.